日本科学者会議（JSA）滋賀支部

NEWS　LETTER

2021年1月8日発行　第63号
事務局長　水原　渉
TEL/FAX　0749-47-5169（共通）
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【年頭のご挨拶】

滋賀支部事務局長　水原　渉

新年が良い年であるように、お祈りいたします。

昨年は新型コロナの世界的蔓延で私達も大きく影響を受け、支部総会や幹事会もWeb方式（ZOOM）を採用しています。全国、近畿地区段階の会議も同様です。

9月半ばには菅政権が発足し、早速、10月に日本学術会議の会員任命拒否問題を引き起こしました。滋賀支部も含め、無数の学会、学術関連団体、市民団体などが抗議し、任命拒否撤回を首相に迫っています。コロナ禍対応でも、むしろ蔓延を促している自公政権ですが、根本には“反知性主義”、新自由主義的経済優先主義（軍学共同も）があります。

今年は政権選挙の衆院選の年です。立憲野党による政権交代を実現させていきたいですね。

【報告】中小企業のコロナ危機と「中小企業半減容認」論の問題点－第1報

個人会員分会　宮川卓也

我が国の中小企業は長引くコロナ禍の中で壊滅的な打撃を受けつつあります。コロナ融資で当面の資金繰りをつないでいる企業もコロナ不況が収束し、経営環境が正常に戻らなければ破綻は時間の問題と言うところも少なくありません。そのような中で菅首相は「成長戦略会議」に「中小企業半減容認」論者、D・アトキンソン氏（以下、ア氏）をメンバーとして招聘しています。菅首相は「ア氏信者」とも言われ、彼の暴論が、引き続き求められるコロナ禍での中小企業支援策後退の理由付けになることが危惧されます。

少ない紙面ですがア氏の著書「日本人の勝算」（以下、「勝算」）の問題点を見ておきたいと思います。**一番目の問題点**はア氏が日本や中小企業の“生産性”の低さを根拠として非難していることです。生産性はGDP／人口、企業付加価値／労働者数（「勝算」）とされていますが、GDPの国際比較はドル換算されるため為替変動の影響を免れません。例えば1995年～2016年を見ると日本は16位から28位に後退していますが、円ベースでは名目GDPが512兆から531兆、実質GDPでも437兆から517兆と増加しています。

ア氏が生産性低迷の主要因として上げている“高齢化”も、07年には高齢化率が21%を超え世界でも類のない「超高齢化社会」に突入している日本においても決してGDPが減少していません。また中小企業の付加価値の低迷は、大企業による“買いたたき”、消費税（租税公課）増税、規制コストの偏重など中小企業がおかれている悪条件を無視するべきではありません。**二番目の問題点**は規模の大小が“生産性”の絶対条件ではないと言う事実です。ア氏は「規模が大きくなればなるほど生産性が高い」（p.124）と断言しますが実は営業利益が10%以上の企業は大企業が8.8%、中小企業は13.4%あります（H11年）（中澤孝夫著「中小企業は進化する」）。また中小企業の売上高営業利益率50%以上のほとんどは1～4人規模とされています（同著）。企業規模は“生産性”の絶対要因ではありません。また**三番目**は「日本では規模が小さい企業が多い」（「勝算」）と言う点ですがこれも違います。例えばアメリカの中小企業一社当たりの従業員数の中央値は4人程度と日本よりも小ぶりです。中央値を基準とした場合、日本の典型的な中小企業は従業員数6人（平均値では19人）となっています（中小企業信用リスク情報データベース（CDR））。（**次号に続く**）

【書評】　尼川タイサク著「びわ湖の畔のニホンミツバチ ―マキノの里でともに暮らす日々―」

評者：沢田裕一
（滋賀県立大学名誉教授、昆虫学）

大学を定年退職し、豊かな自然が残る琵琶湖北部のマキノ町に移り住んだ著者が、旧来の知人に勧められニホンミツバチを飼育することから本書は始まる。ニホンミツバチは日本古来の在来種で、養蜂業のため導

入されたセイヨウミツバチに押されて数が減少、絶滅が危惧されたこともあったが、今、野外にしっかり生息しつづけ、花粉媒介により日本の自然や農業に大きな貢献をしている。本書は、この独特の生活スタイルを持つニホンミツバチとの暮らしについて、季節を追って日記風に綴ったものである。

本書を読んで特に印象に残ったテーマは、分蜂（巣別れ）とスズメバチである。春から夏にかけ、働きバチの数や貯蔵蜂蜜などに余裕ができ、娘女王バチの羽化が始まると、母親女王バチは約半数の働きバチを従えて出ていき（巣別れ：分蜂）、娘女王バチが古巣を引き継ぐ。巣箱から飛び出した分蜂の群れは、一時的に、近くの木の枝（止まり木）に半球状の塊（蜂球）を作り、この蜂球を捕獲することにより、新たなミツバチ・コロニーを獲得できる。蜂球は高い木の枝や、枝の繁みの中に作られることが多く、蜂球を回収するのは容易ではないため、多くの場合、ハチ仲間の応援を得た共同作業になる。分蜂の開始が察知されると、直ちにハチ仲間に連絡する。琵琶湖の対岸（湖東地方）に住むハチ仲間は、新たに開発した止まり木（分蜂の群れを蜂球にして止まらせ回収する道具）を手に応援に駆けつける。松の高木に蜂球が形成されると、プロの庭師であるハチ仲間が、長い梯子をもって駆けつけ、慣れた足取りで梯子を登り、邪魔な小枝をうまくカットしつつ蜂球を回収する。新たに獲得した分蜂群は、元の家族と餌場を争うのを避ける傾向があるため、飼育を希望するハチ仲間に里子に出すことになる。このような、ハチ飼いにとっての重要なイベントである分蜂を通して、著者の周りのハチ仲間のネットワークは大きく拡がっていく。本書は、このようなハチ仲間のメーリングリストへの著者の投稿文を取り纏めて出版したものである。

分蜂により勢力を増大したハチたちには、台風や冬の寒さ、寄生ダニ（アカリンダニ）など多くの苦難が待ち受けるが、特に印象深いのはスズメバチの来襲である。新参者のセイヨウミツバチは、真正面からスズメバチに立ち向かい噛み殺されて玉砕するが、ニホンミツバチは集団でスズメバチを取り囲んで蜂球を作り、発熱、熱死させる有名な「ふとん蒸し」作戦によって撃退するといわれる。しかし、現実はそんなに甘くはない。数頭ならまだしも、数十頭、時には100頭を越すスズメバチに襲われると、さすがのニホンミツバチも、巣箱に退避し籠城するしかない。著者は、新たに開発されたスズメバチ忌避スプレーや、ネズミ用の粘着板を設置して撃退を試みるが、ついには、目深に帽子をかぶり、首筋を守るためタオルを巻き付け、著者自ら手網を持って出陣した。スズメバチはパワーがあり飛ぶのは早いが、胴体が大きい分だけ小回りや敏捷さに欠け、手網によりかなりの数を捕獲しスズメバチを撃退した。撃退後、ハチたちからのお礼の言葉がないのは少し残念だったが、ハチたちは敵の残した餌場を示すマーキングの跡を丁寧にかじり取り、臭いをごまかすため自らの糞をあたりにまき散らす。このような人間臭い行動（ふるまい）を見て、著者は、「なかなかやるじゃないか！」と苦笑する。

著者は、ミツバチの高度なコミュニケーション能力や、個体間の連携と分業を生かした「虫らしくない生き方」、時として見せる「人間臭さ」に魅了され、定年後10年間、ミツバチを飼育してきた。マキノの里でのミツバチとの暮らしは、ハチ仲間と呼ばれる同業者のネットワークを築き、自然環境の悪化によって危機に瀕するニホンミツバチを守る運動へと発展した。また、百花蜜ともいわれる貴重なニホンミツバチの蜂蜜を入手し、庭のサクランボとビワの木は、ミツバチの受粉により豊かな実りが保証されている。このような、著者のマキノの里でのミツバチとの暮らしは、定年後の人生の１つの理想の姿を示しているのではないか。是非、一読をお薦めする。

【滋賀支部 第56期第4回幹事会報告】

今回は実践的視点での情勢討議が行われた。バイデン次期米大統領への核禁条約批准要請；住民自治・民主主義の視点での辺野古基地建設抗議、大学学長選問題・人事問題の全体的把握をJSA（全国）に提案するなど。 次回は2021年2月20日（土）9時半から12時までの予定。E-メール登録の会員には、Web幹事会へのご案内をするので、遠慮なく参加してください。